

礼子内親王・揭子内親王（文徳天皇皇女）

皇女研究会

『本朝皇胤紹運録』には、礼子内親王と揭子内親王は並んで記されており、次のように書かれている。

禮子内親王（母同惟恒）

楊子内親王（斎宮、母同）

「楊子」と記されているのが、「揭子」内親王のことであるが、とりあえず、ここでは『三代実録』の表記に従い「揭子」とする。このことから礼子内親王は、惟恒親王と同母であり、揭子内親王は斎宮であって、かつ礼子内親王と同母であるということがわかる。『本朝皇胤紹運録』は惟恒親王を「三品兵部卿。母藤今子。守貞女」としている。『一代要記』も同様である。しかし『帝王編年記』は惟恒親王の母は「藤原今子参議貞守女」とす

る。『尊卑分脈』『惟恒親王』には「三品兵部卿母藤原今子参議守貞女」とあって、頭注には『帝王編年記』が「守貞」を「貞守」としているとの記述がある。惟恒親王の外祖父が「守貞」か、「貞守」という問題であるが、六国史には「藤原守貞」なる人物を見いだすことはできない。『公卿補任』にも「参議藤原貞守」はいるが、「守貞」は見あたらない。ちなみに『尊卑分脈』には魚名流に「守貞」なる人物の名が見られるが、時代が異なり別人である¹⁾。

一方「藤原貞守」は、天長五年（八二八）正月七日に藤原良房や、安部安仁等十二名とともに、正六位上から従五位下に叙されているのが、初見され、それからは次のように順調に官を進めている。

天長十年（八三三）二月十九日、從五位上
 天長十年（八三三）二月三十日 春宮亮（兼、讃岐介）
 承和七年（八四〇）正月三十日 豐前守（兼、春宮亮）
 承和八年（八四二）正月十三日 信濃介（兼、春宮亮）

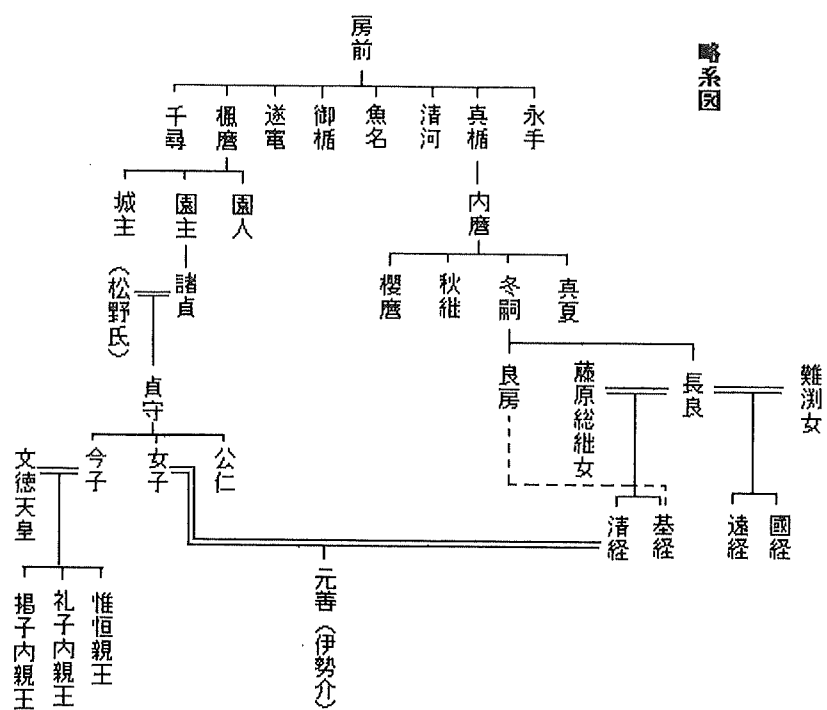
しかしながら、貞守は恒貞親王の春宮亮であつたために、嵯峨天皇が崩御した直後に起こった承和の変に巻き込まれ、承和九年（八四二）七月二十六日 越後権守に左遷された。このときの『続日本後紀』には、「亮從五位下藤原朝臣貞守為越後権守」とあつて、位に問題があるが、承和十四年（八四七）二月一日に勅命により許されて帰京した際の記事には「前越後国権守從五位上藤原朝臣貞守」とあること、『日本紀略』においては「從五位上」とされているので、承和九年の記事は単なる誤写であらう。許されて帰京したのち、藤原貞守の官位はまた以前と同様に順調にあがっていく。

承和十四年（八四七）十月 十七日 河内和泉次官

承和十五年（八四八）一月 十三日 備中守
 承和十五年（八四八）二月 十四日 式部少輔
 嘉祥 三年（八五〇）一月 七日 正五位下
 嘉祥 三年（八五〇）一月 十五日 式部少輔兼備前介
 嘉祥 三年（八五〇）三月 十七日 左右兵庫使
 嘉祥 三年（八五〇）十一月二十九日 右中弁兼備前介
 仁寿 元年（八五二）四月 一日 出居侍從
 仁寿 元年（八五二）十一月二十六日 從四位下
 仁寿 二年（八五二）二月二十八日 左中弁
 仁寿 三年（八五三）一月 十六日 右大弁
 仁寿 三年（八五三）八月 八日 參議
 斉衡 元年（八五四）一月 十六日 下野守
 斉衡 二年（八五五）一月 七日 從四位上
 斉衡 三年（八五六）二月 七日 辭職
 貞觀 元年（八五九）五月 一日 卒去

今子所生の皇子女が親王宣下を受けたこと、掲子内親王がのちに斎宮に卜定され、惟恒親王が最終的には三品兵

略系図



部卿となつていふことからいって、本稿では『帝王編年記』の記述をとり、今子の父は国史等に全く記録が残っていない守貞ではなく貞守であると考える。

藤原貞守は『尊卑分脈』によれば、藤原北家の房前の子、楓磨の曾孫である。『尊卑分脈』では貞守の子としては公仁（從五下）と女子の二名のみが挙げられており、女子には参議清経室「伊世介元善母」と記されている。従つてこの女子は、惟恒親王等の生母である今子ではないと考えられる。文德天皇の後宮にありながら、その名が系図に残らず、惟恒親王と礼子内親王が親王宣下を受けた仁寿元年（八五二）四月二十五日の記事にも「母藤原「朝臣」とのみ記述されていることから考えて、今子は公仁や清経室の女子とは異母であり、母の身分がかなり低かつたのではないかと推定される。

藤原貞守は一度は政治の表舞台から失脚しながら、勅命によつて復帰し、その人物故に政において、重きをなした。貞守は卒伝に「器宇凝峻。頗有学涉」と記される。人となり飛び抜けて勝れており、学問に秀でていたと

いうことである。この記述は、貞守が当初、仁明天皇の皇太子であった恒貞親王の春宮亮に選ばれたことと、それによって承和の変に巻き込まれながらも、再び朝政に復帰し、参議となったことによって裏付けられる。『三代実録』承和九年（八四二）七月二十六日の詔によって左遷された者は、藤原朝臣高直以下「配流者惣六十餘人」とされている。そのうち承和十四年（八四七）二月の勅命によって京都に召還されたものは、藤原朝臣高直、藤原朝臣貞守、藤原朝臣近主、藤原朝臣正世そして六位以下六十二人である。名前が明記されているものがすべて藤原氏であるという点に特徴がある。この記事にあげられている藤原氏のうち、高直は、承和十五年（八四八・嘉祥元年）正月十三日に「從五位下駿河守」とあるのが、六国史にみえる最後の記事であり、近主は斉衡三年（八五六）正月七日に從五位上、正世は貞観三年（八六一）正月十三日に大藏少輔從五位下因幡介とあるのが最後のものである。つまり從四位上参議にまで昇進したのは貞守のみであった。他の要因があつたにせよ、貞守の官

吏としての能力が非常に優れていたであろうことと、その人柄が広く受け入れられていたことがあらためて確認される。

さて、仁寿元年（八五一）四月二十五日、皇子惟恒と皇女礼子に親王宣下が下された。

文德天皇皇子。男二人女三人。未定名号。是日。或爲親王。或爲朝臣。惟恒親王。禮子内親王並母藤原「朝臣」氏。源朝臣行有母布勢氏。源朝臣富子母菅原氏。源朝臣淵子母滋野氏は也。

このとき、掲子内親王の名前が挙がっていないことから、この時点ではまだ生まれていなかったと考えられる。文德天皇が崩御したのは天安元年（八五七）八月二十七日である。したがって掲子内親王の出生は、八五一年から八五八年の間となる。

では、惟恒親王と礼子内親王の出生はいつ頃と推定されるであろうか。文德天皇が元服したのは、承和九年（八

四二）二月である。この時から惟恒親王等が親王宣下を受けた八五一年までの間の貞守の経歴をみると、嘉祥元年（八四八）一月十三日にはやくも、備中守となり、二月十四日に式部少輔となっている。備中は上国であり、都にも近い。前年に河内和泉次官になったばかりからの転任であるので、これが皇子女の誕生によるものではないかと考えられるのである。惟恒親王と礼子内親王のどちらが年長かは、『本朝皇胤紹運録』の記述が、大体において、男子を優先的に記述することから不明である。いずれにせよ、そう年が離れていたとは思われない。八四八年に今子が最初の子を産んだとすれば、次子は、八四九年から八五一年に生まれていることとなる。順当に考えれば、今子が文德天皇のもとに入侍したのは貞守が配流先から戻ってからと考えられるため、惟恒・礼子両親王は、八四八年から八五一年の三年の間に誕生していると思われる。

礼子内親王に関する記事は、『本朝皇胤紹運録』『皇代記』（群書類従所収）『帝王編年記』『一代要記』におい

て、惟恒親王と同母であること、昌泰二年（八九九）十月七日に薨去したことが記され、先に記した『三代実録』の記事によって、惟恒親王とともに親王宣下が下されたことがわかるのみである。

掲子内親王は、名前に異同があるが、『三代実録』『日本紀略』『一代要記』『帝王編年記』『二中歴』等に「掲子」と記されていること、本稿では国史である『三代実録』の記述に特に不審な点はないことに鑑みて「掲子」としておく。また『帝王編年記』では「母同惟喬伊勢斎宮」と書かれているが、これは、前々斎宮恬子内親王との「斎宮」ということによる混同であろう。掲子内親王は斎宮に卜定された後、元慶七年（八八三）八月二十四日に鴨河において禊をし、野宮へ入っている。そのとき掲子内親王を陪送したのが、源能有と藤原国経である。国経は長良の子、基経の異母兄である。そうした人物が陪送していることからいっても紀氏所生の惟喬親王と同母であるとは考えにくい。掲子内親王の外祖父、藤原貞守は、一女子を藤原清経室としていることは、前述し

た通りであるが、清経もまた長良の子であり、基経の同母弟である。掲子内親王は前任の斎宮識子内親王が父清和上皇の喪によって退いたのち、陽成天皇の二代目の斎宮として元慶六年（八八二）四月七日に伊勢斎宮に卜定された。翌年八月二十二日に建礼門前において、大祓をし、二十四日に野宮に入った。通常ならば、一年後に伊勢群行が行われるが、陽成天皇が元慶八年（八八四）二月四日、わずか十七歳で譲位したために群行を行うことなく退いた。『三代実録』元慶八年（八八四）二月十三日条には

先是、伊勢斎内親王、在野宮。是日、還本家。

とあって、掲子内親王が野宮を退き、戻ったことが記されている。

掲子内親王が斎宮に卜定されたとき、賀茂斎院については「賀茂斎者、諸内親王不ト食、故今日無定」とある。

二日後の四月九日に、後に光孝天皇となる一品式部卿時

康親王の娘、穆子女王が選ばれた。

さて、今子所生の内親王のうち、何故、姉の礼子内親王ではなく、掲子内親王が斎宮に選ばれたのかを考えるとき、考えられる問題は年齢ではないかと思われる。掲子内親王の出生は最も遅い場合は、父文徳天皇が亡くなった翌年、八五八年である。そうすると卜定時、二十六歳であつたことになる。最も早い可能性の八五一年とすれば、三十三歳である。当然のことながら礼子内親王はもつと年上となる。前任者識子内親王は卜定時三歳、その前の恬子内親王は九歳位³、久子内親王が五歳位⁴ということから考えると二十六歳は高齢であるといわざるをえない。従つて年齢の若い方が選ばれたのではないかと思われるのである。元慶八年（八八四）に存命で、しかも伊勢斎宮も賀茂斎院も経験していないものは、文徳天皇の内親王では、滋野朝臣奥子所生の濃子内親王一名のみである⁵。濃子内親王の同母兄妹である惟彦親王は元慶七年（八八三）に四十四歳で亡くなっている。妹である勝子内親王が貞観十三年（八七一）七月二十八日に

亡くなっていることと併せて推測すれば、礼子内親王よりも更に年長だったと考えられる。清和天皇の内親王をみると、包子内親王は、藤原行平女所生で、貞教親王と同母である。貞教親王が誕生したのは、享年からの逆算で元慶八年（八八四）である。姉であつた場合は誕生していたが妹であつた場合は誕生していない可能性が高い。孟子内親王は藤原諸葛女所生、延喜元年（九〇一）に亡くなっていることがわかつているのみである。結局のところ、掲子内親王が「選ばれた」ということ自体、内親王に限っていえば他に適当な候補者がいなかったと考えざるを得ない。このことは賀茂斎院に皇統の異なる時康親王の娘が卜定されたことからもうかがえる。ただ、同母姉妹で斎宮・斎院に選ばれることもあるので、何故礼子内親王が卜定からはずれたのかという疑問は解消しない。これ以上の史料がない以上は、残念ながら、疑問のままでおくしかないであろう。

礼子内親王と掲子内親王の生母今子に関しては六国史等にも全く記述がない。しかし、外祖父藤原貞守が前

述のように朝堂において、重きをなしていたために、卒去する貞観元年（八五九）までは何の憂いもなかったはずである。卒去の後には貞守男公仁かもしくは貞守の女婿である藤原清経、清経を通じて基経が後見したであろう。貞観十三年（八七一）になると惟恒親王が四品に叙される。このときの惟恒親王の年齢は推定二十歳から二十三歳。この後、惟恒親王は常陸大守や上野大守等となり、最後には兵部卿となっている。

貞観十四年（八七二）	常陸大守
貞観十五年（八七三）	帯剣をゆるされる。
貞観十七年（八七五）	治部卿・上野大守
元慶元年（八七七）	弹正尹・兼上野大守
元慶六年（八八二）	上総大守
元慶七年（八八三）	上野大守
元慶八年（八八四）	兵部卿

したがって、同母姉妹の後見は成長した惟恒親王が行つ

たと考えられる。なお惟恒親王の品位については『皇代記』（群書類従所収）・『帝王編年記』・『一代要記』には「三品」と書かれているので、最終品位は三品と考えられる。惟恒親王が亡くなったのは『一代要記』によれば延喜四年（九〇四）四月である。礼子内親王は昌泰二年（八九八）十月七日薨、掲子内親王は延喜十四年（九一四）二月二十三日薨、いずれも『一代要記』による。すでに醍醐天皇の時代となっていた。

文徳天皇の後宮において親王宣下を受けた皇子女を持つ女性には、藤原良房女明子を筆頭に、紀名虎女静子、滋野貞主女奥子、藤原貞守女今子、藤原是雄女列子の五名である。良房が紀静子所生の第一皇子惟喬親王を置いて、わずか生後八ヶ月の惟仁親王を立坊させたのは嘉祥三年（八五〇）十一月二十五日であった。翌年の四月一日、藤原貞守は出居侍従となり、二十五日、惟恒・礼子に親王宣下がなされたわけである。惟仁親王の立太子が確定してからの親王宣下である。前出の記事のとおり、布勢氏・菅原氏・滋野氏所生の子女は源氏を賜姓されて

いる。この処置が藤原氏の優位を印象づけたことは否めない。また穿った見方をすれば、明子には惟仁親王しか男子はおらず、惟喬親王をはじめ第一皇子から第三皇子までが藤原氏所生の母でないことを考え合わせると、惟恒親王に対する親王宣下は、他氏所生の親王等に対する牽制の意味合いがあったとは考えられないだろうか。ちなみに文徳天皇が紀静子を寵愛したであろうことは藤原行成の『権記』寛弘八年五月二十七日条に「天皇の愛姫紀氏産む所の第一皇子（惟喬親王）、其の母の愛に依ってまた優寵せらる」とあることから明らかである。滋野奥子は『文徳実録』に「頗有風儀。閭訓克脩。為天皇所幸」と記される。これに対して今子については全く記事がないことを考えると、良くも悪くも特徴がなかったと考えざるを得ない。今一人の藤原氏である是雄女列子は、『古今和歌集』八八五番歌の詞書きによれば、なんらかの過ち―密通か―を犯し、そのために所生の慧子は斎院を降りている。

『古今和歌集』八八五番歌

田むらのみかどの御時に、斎院に侍りけるあきら
けいこ（慧子）のみこを、母（從五位上是雄女）
あやまちありといひて、斎院をかへられんとしけ
るを、そのことやみにければ

あま敬信（よるかの朝臣の母）

大空をてり行く月し清ければ雲かくせども光けなくに

（一）は傍記

また、『文徳実録』天安元年（八五七）二月廿八日条にも次のように記される。

廢鴨齋内親王惠子。更立无品述子内親王爲齋内親王。
遣右大臣正三位藤原朝臣良相於神社告事由。其事秘者。
世無知之也。

「惠子」と「慧子」は同音による表記の違いであり、同一人物である。良房女明子は別格としても藤原氏以外の

出身の女性が文徳天皇の関心を惹きつけていたことは、良房にとつては問題であったことであろう。貞守は北家の傍系である。貞守の今一人の娘が基経の同母弟清経の室となっている。これは貞守と良房養子である基経との結びつきを示す。結果からみても推論ではあるが、良房は貞守の人柄を見、他氏に対する牽制とはなっても、自らの脅威にはなりえないことを見越したのではないだろうか。貞守は終生良房・基経と対立することはなかった。惟恒親王がそれなりの待遇を受けていることからみても、貞守や惟恒親王が良房等にとって危険な野心とは無縁で、己の位置をわきまえて基経の傘下に収まっていたことは間違いない。従って良房―基経の流れが続く限り、惟恒親王が亡くなったあと、残された掲子内親王が、たとえ貞守の子孫がさほど出世をしなかったにせよ、また皇統が変わったにせよ、困窮するということはなかったと思われる。貞守が良房のもとで有能な官吏としての責務を全うし、子孫が頭角を現さなかったことがむしろ幸いしたというべきかもしれない。兄妹姉妹のなかで最

も長生きをした掲子内親王は、晩年の十年程は、直接の後見としては、母の異母姉妹が室となった清経あたりの庇護を受けていたと考えてよいのではないだろうか。貞守男公仁は、『尊卑分脈』によれば従五位下どまりである。それに対して清経は参議右衛門督従三位になつてゐる。清経は、延喜十五年(九一五)、掲子内親王が亡くなった一年後に世を去った。なお、清経の後裔は高倉家を名乗り、江戸時代まで続いている。

(一文字昭子)

¹ この「藤原守貞」は「彈正忠・民部大夫」との傍記があり、父は藤原孝範となつてゐる。藤原孝範には「下総権守・長門守・民部丞」とあり、『国司補任』によると、嘉保元年(一〇九四)の長門国の項に「前守藤原孝範閏三月十日見」(中右記)とある。

² 福井俊彦氏は「承和の変についての一考察」(『日本歴史』二六〇号・一九七〇年一月)において、「貞守は「器宇凝峻、頗有学涉」といわれ、また承和の変で一度越前権守に左遷されながら、再び式部少輔、右中弁、左中弁、右大弁をへて仁寿三年に参議に登用され式部大輔を兼ねたことからわかるように秀れた人物であつて、有力

な藩邸の旧臣となり得る人物であつた。」と評価されている。

³ 皇女総覧二十「恬子内親王・述子内親王・珍子内親王(文徳天皇皇女)」(「瞿麦」第十八号・平成十六年十二月)。

⁴ 皇女総覧十八「親子内親王・平子内親王・久子内親王(仁明皇女)」(「瞿麦」十六号・平成十五年)。

⁵ 恬子内親王(斎宮)、述子内親王(斎院)、珍子内親王(元慶元年四月二十四日薨)以上、紀静子所生。晏子内親王(斎宮)、慧子内親王(斎院)以上、藤原列子所生。次に清和天皇の内親王については、敦子内親王(斎院)藤原高子所生、識子内親王(斎宮)藤原良近女所生。⁶ 仁寿二年(八五二)二月八日条

●史料 文頭の数字は西暦、()内は筆者注、()は割注の部分、「」は史料の頭注である。

先に記述した史料の本文を掲載してある。

【禮子内親王】母、藤原今子／同母姉妹、掲子内親王／最終位、無品

861(貞観三年四月二十五日己巳)文徳天皇皇子。男二人女三人。未定名号。是日。或為親王。或為朝臣。惟恒親王。禮子内親王並母藤原「朝臣」氏。源朝臣行有母布勢氏。源朝臣富子母菅原氏。源朝臣淵子母滋野氏は也。『三代実録』

禮子内親王(母同惟恒)〔頭注〕要記、禮子内親王、昌泰二年十月七日薨『本朝皇胤紹運録』

禮子内親王(昌泰二年十月七日薨)『一代要記』

皇女 禮子内親王『皇代記』(群書類従所収)

皇女 礼子内親王(母同惟恒)『帝王編年記』

【掲子内親王】母、藤原今子／同母姉妹、禮子内親王／最終位、無品

862(元慶六年四月七日己卯)是日。卜定伊勢斎内親王。无品掲子内親王卜食。其賀茂斎者、諸内親王不卜食。有今日无定。『三代実録』『日本紀略』『類聚国史』『伊勢斎宮』『賀茂斎院』

862(元慶六年五月十五日丙申)遣使奉幣伊勢大神宮及賀茂神社。告以定斎内親王并斎王也。散位従五位下時景王、為伊勢大神宮使。参議正四位下行右衛門督藤原朝臣諸葛、為賀茂神社使。『三代実録』『日本紀略』『類聚国史』『伊勢斎宮』『賀茂斎院』

883 (元慶七年八月二十二日乙卯) 大祓於建礼門前。以廿四日、伊勢齋内親王可入野宮也。『三代実録』『日本紀略』『類聚国史』『伊勢齋宮』

883 (元慶七年八月二十四日丁巳) 伊勢齋揭子内親王、臨鴨河修禊。便入野宮。中納言從三位兼行左衛門督源朝臣能有・参議正四位下行皇太后宮大夫藤原朝臣國經陪送。所司供奉如式。『三代実録』『日本紀略』『類聚国史』『伊勢齋宮』

883 (元慶七年十一月五日戊辰) 是日。減定伊勢齋内親王野宮夫数。元工三千十五人、夫一万五百四十五人。今定工千四百六十五人半、負二百七十二人。先是、木工權大亮正六位上内藏朝臣有永等解稱。謹檢先例、徵發五畿内并近江美濃丹波但馬播磨等国所役人別十日。而右弁官濟事之道、公平為先、度之程、何者恒例。今美濃但馬播磨等国、往還稍遠、人民多煩。宜暫停件三箇国、随狀增加。今所作屋舍之數、頗倍於先、結構之功、合期而成。

減定単功既過半。望請。願功當時、遺例後代者。勅。依請、立以恒例。『三代実録』『類聚国史』『伊勢齋宮』『日本紀略』

※日付に錯簡がある。原本は元慶六年十月五日条となっているが、『類從国史』『日本紀略』により訂正した旨、『増補六国史』頭注に記される。

884 (元慶八年二月十三日甲辰) 先是、伊勢齋内親王、在野宮。是日、還本家。『三代実録』『日本紀略』

884 (元慶八年三月二日癸亥) 固美濃關使散位從五位上藤原朝臣有文解関復命。先是、遣使修造伊勢大神宮。是日、下知伊賀・伊勢・尾張・参河・遠江等国司曰。廼者有太上天皇遜位之事。齋内親王出於野宮。暫停雇送神宮之工夫。『三代実録』

914 (延喜十四年二月二十三日庚寅。前齋宮揭子内親王薨) 文德第七皇女『日本紀略』

楊子内親王 (齋宮。母同 (禮子)) (頭注) 按、楊子、三代実録、紀略、要記、編年記、二中歴、作揭子、紀略、延喜十四年二月廿三日、前齋宮揭子内親王薨、文德第七女『本朝皇胤紹運録』

齋宮 揭子内親王 (文德四女元慶六年卜定) 『一代要記』『一代要記』『陽成天皇』

皇女 楊子内親王『皇代記』(群書類從所収)

揭子内親王 (母同惟喬伊勢齋宮) ※頭注 揭、伴本并一本及皇代記紹運録作揚、三実紀略與此同○ (喬)、紹運録作 (恒)『帝王編年記』『文德天皇』

齋王識子内親王 (清和第四皇女) / 揭子内親王 (文德第七皇女) (頭注) 揭、紹運録作揚、三実與此同『帝王編年記』『陽成天皇』

揭子内親王 (齋院天安元年 或云元慶六年四月為齋院八月退延喜十四年二月二十三日薨)『一代要記』『文德天皇』